

ジャイナ教聖者伝の展開と人間観の変容

日本佛教学会 2017 年度（第 87 回）学術大会 発表要旨

山畑倫志

（北海道科学大学／紹介校：北海道大学）

ジャイナ教説話文学の伝統では、教義上重要とされる人物たちを六十三偉人としてまとめ、伝記を作成することが頻繁に行われてきた。そうして作られた聖者伝は説話における枠構造の外枠としても機能し、そこに内外の説話が取り込まれ、特に北インドの西部地域において聖者伝文学が発展していった。

だが、それら聖者伝の展開過程をみていくと、十二～十三世紀を境に性質が大きく変わっていることがわかる。本発表では特にジャイナ教聖者伝における聖者の位置づけの変化に着目して論じていく。

ジャイナ教の聖者を扱った伝記としては古くは『カルパストラ』の祖師伝などが見られるが、徐々に過去の祖師や転輪聖王の記述が加わり、さらにラーマやクリシュナの伝記も付加されていく。そうして形成されてきたのが、三～六世紀の『パウマチャリウ』や七世紀の『パドマプラーナ』、八～十世紀の『パウマチャリウ』や『マハープラーナ』、そして十二世紀のヘーマチャンドラの『六十三偉人伝』に至る聖者伝文学である。これらはマハーラーシュトラ語やサンスクリット語、アパブランシャ語といった複数の言語で書かれてはいるが、どれも古典的な文語としての性質が強く、地域性が強く出ているわけではない。またこの種類の聖者伝は分量が長大となるとともに、形式も洗練されていく。特にアパブランシャ語で書かれた聖者伝はサンディ・バンダという形式が広く用いられる。

それらの古典的な聖者伝に対して、十二世紀末頃から六十三偉人やその関係者の個々を取り上げた聖者伝が多く作成されていく。主題となる人物としては第一祖師リシャバの息子のバラタとバーフバリ、第二十二祖師ネーミとその妻ラージュマティーなどが代表的である。また各地にある聖地との結びつきが強く示されるのも、この時期以降の聖者伝の特徴である。現グジャラート州にあるギルナール山はネーミと、シャトルンジャヤ山はリシャバとの関係が強調され、現ラージャスターン州に位置するアーブー山は聖地自体が作品の主題となる。使用言語もそれ以前まで頻用されてきた古典語ではなく、古グジャラート語などの地域性の強い言語がしばしば用いられる。形式としてはアパブランシャ語による聖者伝のように一つの形式にまとまっていくのではなく、ラーソー、チャルチャーリー、バーラーマーサーといった様々な形式で書かれていく。さらに時代が下るとこれらの諸形式は非ジャイナ教徒にも用いられるようになり、多様な文学作品へと展開していく。

この二種類のジャイナ教聖者伝は、同じ聖者伝ではあるものの、主題となる人物、形式、使用言語のそれぞれで性質の異なりが見られる。その背景としてはジャイナ教の政治的立場の変化や在家者を含めた教団組織の再編成などが想定されるが、本発表では『パウマチャリウ』、『バラテーシュヴァラ・バーフバリ・ラーサ』、『ネーミ・バーラーマーサー』といった個々の作品内の記述をもとに、二種類の聖者伝のなかでの聖者の人物描写の違いを示し、そのような聖者の扱いの変化が十三世紀以降に多く著されるラーソー文学やバーラーマーサー文学などに影響を与えていることを論じる。

〈キーワード：聖者伝、ジャイナ教、チャリタ、ラーソー〉